



## 豫園書画善会と海上題襟館金石書画会：清末上海における書画団体の分立と共存

著者	菅野 智明
雑誌名	芸術研究報
巻	39
ページ	1-10
発行年	2019-02-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00157244">http://hdl.handle.net/2241/00157244</a>

---

# 芸術研究報 39

*Bulletin of Faculty of Art and Design, University of Tsukuba*

筑波大学芸術系

## 目次

- 1 豫園書画善会と海上題襟館金石書画会：  
清末上海における書画社団の分立と共存  
菅野智明

# 芸術研究報 39

*Bulletin of Faculty of Art and Design, University of Tsukuba*

**2018**

筑波大学芸術系研究報告 第73輯

2019年2月20日

筑波大学芸術系

本研究報収載の論文は  
「芸術研究報に関する規定 平成8年1月17日」に基づき  
査読・審査されたものである。  
本誌への論文掲載順は、編集担当者への原稿提出順によっている。

# 豫園書画善会と海上題襟館金石書画会：

清末上海における書画社団の分立と共存

菅野 智明

## はじめに

近代中国の書画界を特色付ける事象の一つとして、結社の盛行が指摘できる。社約（章程）を設け、活動の目的や内容を明確化し、自律的な活動を展開したこれら結社は、特に「書画（美術）社団」と称され、その研究は少なからず蓄積を見せている。のみならず、現在ではこれら書画社団の網羅的な研究史回顧も試みられるようになった<sup>1</sup>。それは、書画社団研究が中国美術史研究の一環をなす領域として成熟しつつあることを知らしめる<sup>2</sup>。

それらの回顧が現下最も評価する書画社団研究の一つに、喬志強『中国近代絵画社団研究』<sup>3</sup>がある。同著は標題どおり「絵画」社団への限定はあれ、清末から民国期にかけての各社団の事跡を包括的に眺望しつつ、それらの史的展開（画期）を四期（承統転型期、初歩発展期、繁栄昌盛期、曲折発展期）で見通し、更には各社団のあり方を四種の類型（雅集模式、社団模式、協会模式、編輯部模式）で捉えようと試みている。かかる画期や類型化の論点は、書画社団研究を体系ある史的研究へ高めるための指標となることが期待される。故に今後は、個々の書画社団の各論的な研究を進めるに際しても、喬説の如き体系化の試みを視野に、当該書画社団の史的位置付けへ向けた更なる追究が求められよう。

ところで、個別の書画社団に目を転じた場合、清末の上海に設立した豫園書画善会（以下「豫園会」と略）と海上題襟館金石書画会（以下「題襟館会」と略）とは、現下の論者から特に注目を浴びる存在となっている。例えば、豫園会と題襟館会の両社団に、後発の停雲書画社を加え「上海書画社の三鼎足」との呼び声もある<sup>4</sup>が、確かに両社団に関する早期の記録<sup>5</sup>によれば、錚々たる書画家を多数擁し、活動も長期間に亘り、ともに上海を代表する書画社団であったことが知られる。

したがって両社団は、現下の社団研究でも頻繁に論及され、特に経済都市として往時急激に成長しつつあった上海という地域性から、その商業的性格が論点とされる傾向にある<sup>6</sup>。こうした商業性をめぐる議論では、多くが両社団の章程に、会員の作品売買や利潤の分配にかかる方を細かく規定している点を論拠としており、それに加え、両社団には財界人の支援、即ちパトロンの存在があったことも注目されている<sup>7</sup>。また、豫園会のような慈善活動は、そうした商業性が指摘される一方、前代来盛行した「助賑」（義捐）活動の流れを汲むものとしても捉えられている<sup>8</sup>。更に前代からの継承という点では、従前の「雅集」と称されるサロンの性格が引き継がれている点も指摘されている<sup>9</sup>。

こうした中、往時の新聞記事を中心に稀観資料を限なく渉猟し、両社団の精緻な年譜を編まれたのが、王中秀氏である<sup>10</sup>。王氏は、これら新発掘の資料から、題襟館会の前身を中国書画研究会（上海書画研究会・小花園書

画研究会）と見定め、題襟館会の設立を通説よりも遙かに遅い1910年<sup>11</sup>であることを導くなど、旧説を覆す新知見を随所に織り込まれた。故に両社団の研究は、この年譜（以下「王氏年譜」）において次なる段階へ導かれたと言って差し支えないが、年譜所掲の新資料は、単に事跡の編年の具とするのみならず、両社団の史的位置をめぐる材料として、その分析が俟たれるところである。

以上により本稿は、この年譜に依りつつ両社団の事例研究に軸足を置くが、それは両社団が書画社団史上の新たな画期や類型の提起に好適と判断されるためである。結論から言えば、両社団の活動形態を論点とする先学とは異なり、本稿は活動主体たる構成員間の結び付き、言わば人的ネットワークに着目する。そこから浮上するのは、一見独立した組織を成す両社団が、基盤となるネットワークを共有している点である。本稿では表層的に組織される両社団員よりも、むしろ深層で形成される基盤ネットワークを注視し、それへの立脚によって共存する両社団のあり方を特色ある類型として提起する。そして、そのネットワークの機能的始動を然るべき社団史的画期に据えようと企図するものである。

## 1. 豫園会の初期主導者

先ず、豫園会に注目したい。その会員については、上記の「王氏年譜」の他、幾つか記録が備わるが<sup>12</sup>、それらは、初期会員と後続のそれとの別を不問に附す感がある。ここで問題としたいのは、初期の、しかも主導的立場にあった人物である。それを知る手がかりの一つとして、豫園会の発起人の一人であった楊逸（1864-1929）<sup>13</sup>の編んだ『海上墨林』（上海豫園書画善会 民国9～18）<sup>14</sup>の記述が挙げられる。同書は、上海在住の歴代書画家にかかる小伝集の体裁を取るが、その中で錢慧安（1833-1911）の伝には、豫園会の設立経緯にかかる注記が添えられている。それによれば、1909年、楊逸をはじめ姚鴻（?-?）、黄峻（1875-1923）、汪琨（1877-1946）が社団の設立を発起し、それを高邕（1850-1921）に持ちかけたところ、高は章程の起草や会所の周旋には協力したが、会長就任の要請は固辞し、銭が会長に就いた、というものである。

豫園会設立にかかるこの記述は、楊自身がその当事者であるだけに信憑性が高い。ここで先ず着目されるのは、指導的立場の高である。実は、楊は高に書画を師事しており、この『海上墨林』も高の意向を汲みつつ編まれたものであった<sup>15</sup>。楊と同様に発起人の立場にあった面々を見ると、生年の明らかな黄と汪はいずれも楊より後輩である。このうち黄は、楊と同様に高に師事したとされるが<sup>16</sup>、楊が兄弟子であったに相違なく、発起人では楊が中心的な役割を果たしていたと推察される。

ところで、銭に次いで実際に豫園会の会長に就任した

のは、楊佩甫（1837-1912）、楊葆光（1830-1911）、馬瑞熙（?-1913）という3者であり、このことも、『海上墨林』所録の3者の伝から確認できる。楊佩甫と楊葆光は、銭と同様に1830年代の生まれ。彼等に加え馬も相次いで辛亥革命前後に他界していることから、馬も3者と同世代であろう。いずれも高より遙かに先輩格の重鎮で、特に銭や楊佩甫は、光緒期を下限とした清末の書画家伝『寒松閣談芸瑣録』<sup>17</sup>にも記載が見られ、既にこの時点で名声を博していた。彼等が高に代り会長に就いたことは肯ける。

以上、楊逸『海上墨林』の記載から、差し当たり帰納し得る豫園会の初期主導者は、楊逸、姚鴻、黃俊、汪琨という発起人4名、その師・顧問格であった高邕、そして銭慧安、楊佩甫、楊葆光、馬瑞熙という歴代会長4名となる<sup>18</sup>。

一方、「王氏年譜」所引の時の新聞記事では、これら主導者の他に、豫園会の初期を支えた別の顔ぶれも伝えている。その一つが、「上海書画善会第七次報告」（『時報』1909年12月11日）<sup>19</sup>である。この記事は、豫園会が設立して間もない宣統元年7～9月の会計報告だが、会費を納めた人士の名と額を逐一記しており、王氏も指摘する如く時の埋もれた会員を明るみにする資料として貴重である。果たして約20名が掲げられるこの記事では、黃俊や汪琨など発起人の名も見えるが、ここでは王震（1867-1938）、何汝穆（?-1923）、黃賓虹（1865-1955）、そして韓璋（?-?）の名が見えることを指摘しておく。この4者は、翌1910年に設立される上海書画研究会（海上題襟館金石書画会）の会員を兼ねることになる。因みに豫園会との掛け持ちは、先掲の楊葆光、楊逸、汪琨にも認められるのだが、彼等のそちらでの役割は、次節で述べることにしたい。

ただし、王震、何汝穆が単なる書画家ではなかったことは、ここで予め触れておこう。楊逸とほぼ同世代の王は、既にこの時点で日清汽船株式会社の買弁（中国側經理）に就任（1907年）、実業家としての地位を固めつつ、上海財界の種々の要職を兼務する立場にあった<sup>20</sup>。彼が上記の会計報告において破格の五元を出資する所以である（他の会員の出資額は高々一元程度）。一方の何も、王と同世代であり、『海上墨林』によれば、彼は時に最大手の海運企業であった輪船招商局に勤務していた経歴がある傍ら、上海の書画家たちとは広く親交があったという<sup>21</sup>。両者とも海運業に従事していたことは偶然だろうが、豫園会に財界人が加わることは留意しておきたい。

この他、「王氏年譜」では初期の豫園会の要人を記録する新聞記事を幾つか拾い上げている。そのうちの一つ、設立翌年（1910）に同社団が催した義捐作品即売会に関する記事<sup>22</sup>に注目しよう。この記事では、高邕が篆隸の対幅数十件を寄附し、銭慧安、楊佩甫、黃山寿

（1855-1919）、楊葆光、蒲華（1832-1911）、王震、倪田（1855-1919）も画の合作を数十件申し出たとある。この記事は、豫園会の主導者について幾つかの示唆を与える。先ずは高が筆頭に記されている点。彼の存在は会長をも凌ぐことが察せられる。次に他の者の参画が「合作」の形を取ったという点。ここにおいて黃山寿、蒲華、倪田の3者は、如上の記録に見ない新たな顔ぶれである。3者は、いずれも先掲の『寒松閣談芸瑣録』所録の上海書画界の領袖であり、彼等の伝は楊逸の『海上墨林』も録する。だがそこでは、豫園会への参画を特に記述してはいない。それは、この3者が主たる役職に就かず、一方で題襟館会にも所属していたことに起因するのかもしれないが、歴代会長と自由に合作できた環境に鑑みるなら、彼等3者も実質的に豫園会の指導的立場にあったと見てよい。

ここに名の挙がる書画家たちは、相互に相応の交誼があった筈で、彼等の上海居住歴からすれば、その交誼は当然社団の設立を遡ることになる。一例を挙げれば、豫園会には豫園会の設立以前に飛丹閣書画会が組織されていたが、そこには任頤（1840-1895）等、往時の代表的画家と並んで、蒲華や楊佩甫等が参加していたという<sup>23</sup>。また、場所は蘇州を拠点とするものだが、吳大澂（1835-1902）や顧麟士（1865-1930）を中心に結成された怡園画集には、倪田や下記の陸恢（1851-1920）が加わっていたとされる<sup>24</sup>。豫園会の組織化は、こうした既存の社団で形成されたネットワークを引き継いだ側面がある。

加えて、この合作参加者には、王震が列せられていることも見逃せない。一世代下る王が歴代会長や領袖書画家と肩を並べることは、先述のような彼の実業家としての立場と、同社団への経済的支援に起因しよう。そして、こうした領袖書画家と王震による豫園会の主導は、しばらく続いたようで、その点を「王氏年譜」所掲の豫園会主催「金石書画展覧会」（1913年）にかかる新聞記事から窺うことにしたい。

同展は、上掲の企画と同様に展示即売会の広告であるが、販売対象に「金石」（実質的には古碑帖か）が加わる。即ち同社団の面々が書き下ろした作品よりも、彼等が収蔵した古書画碑帖を主とする即売会であったと見られる。この企画について、新聞記事では、高邕、陸恢、倪田、黃山寿、王震等がこの企画に歓喜した旨が記され<sup>25</sup>、更に、会期中の展覧会へ陳某を引き連れ、哈慶（1856-1934）が訪れた模様も伝えている<sup>26</sup>。

この記事によれば、やはり高が筆頭に置かれる他、倪・黄といった高の世代の領袖書画家も居並んでいる。歴代会長の大半が他界し、彼等と同世代の蒲華をも失った当時、豫園会の次世代の担い手は、高や倪・黄であったようである。更にこの記事では、新たに陸恢の名も挙がっている。彼も高とほぼ同世代で、上掲の怡園画集に加わ

る他、倪・黄と同様に題襟館会にも所属していた著名書画家である。一方の哈麐は題襟館会の要人であり、豫園会の企画への積極的な参与の事跡は窺えない。しかし、哈の同展参観が双方の社団の親密さを伝える話柄の一つであることは確かである。

以上のように、当時の豫園書画善会にかかる新聞記事は、高邕と歴代会長・発起人の他に、蒲華・黄山寿・倪田、陸恢という往時の領袖書画家、そして王震という財界人の存在を際立たせている。彼等は初期の同社団における実質的な主導者と見て大過ない。加えて本節では、彼等の多くが題襟館会に兼ねて所属していた点に触れたが、では、この題襟館会の主導者は、いかなる顔ぶれであったのか。以下に見てゆこう。

## 2. 題襟館会の初期主導者

豫園会が設立した翌年（1910）、各新聞には、小花園書画研究会、中国書画研究会、上海書画研究会といった社団の記事が断続的に掲載されることになるが<sup>27</sup>、「王氏年譜」は、これら全てが題襟館会の前身組織であることを明らかにされている。本稿はこの見解に従い、上海書画研究会の名で役員一覧を掲げた記事に注目し、これを題襟館会当初の役員に相当するものと見做す。掲出順に総董、総理、協理、庶務、駐会庶務、会董、会友と列記されるこれらの役職は、職階の上下を示してもよい。以下、総董から会董までの人士について、先に確認した豫園会の主導者に下線を引きつつ示す<sup>28</sup>。

総董：汪洵      総理：李鍾珏      協理：哈麐、毛経疇  
庶務：倪田      駐会庶務：趙雲舫  
会董：楊葆光、李正華、龐元濟、何汝穆、何維樸、呂景端、朱研濤、狄葆賢、蒲華、黄山寿、程祖福、姚鍾葆、劉炳照、胡琪、王震、夏小谷、陸恢、謝峙淳、黄秀伯、曹恂卿

この一覧から明らかのように、これらの要職に豫園会主導者が少なからず認められることは、先ず銘記しておきたい。会董の楊葆光は、豫園会の会長であったし、庶務の倪田、会董の蒲華、黄山寿、陸恢といった面々は上海の領袖書画家。そして世代は下るが会董の王震も、領袖書画家たちとともに豫園会の諸企画で取り沙汰される存在であった。何汝穆が同列に並ぶのも、彼の企業人としての立場が与ってのことであろう。また、会董の下位に、50名余りが列記される会友のポストでは、発起人の楊逸や汪琨、そして豫園会の活動へ出資していた韓璋や黄賓虹の名も見える。豫園会の主導者の筆頭とすべき高邕の名こそ見えないものの、題襟館は相当数の豫園会主導者が兼ねているのである。

ところで、これら役職の筆頭に掲げられる汪洵（1846-1915）は、1892年の進士で、翰林院編修を授かったが、その後官途を棄て上海で鬻芸の道を歩んだ。進士という

経歴と、上海における書画家としての実績から、彼が題襟館会の代表を務めることは何ら不自然ではない<sup>29</sup>。

続く総理の李鍾珏（1854-1927）と、協理の哈麐・毛経疇（1882-?）の3名には、上海の地で成功した財界人として、且つ書画に精通した収蔵家として接点がある。李鍾珏は、この時期、中国通商銀行の総董にあり、江南製造局（中国最大の軍事工場）の提調や、先掲の輪船招商局の董事等の要職を兼務しつつ、所謂「紳商」として上海財界を率い、上海の自治組織の確立にも中心的な役割を果たしていた<sup>30</sup>。彼は一方で古書画の蒐集にも精力的で、題襟館会の設立から間もなくの1913年暮に、彼は訪問先の日本（神戸及び東京）で所蔵する古書画の展覧会を開催、東京での展示品は800件を超えたという<sup>31</sup>。

哈麐は回族の骨董商で、既に1901年の時点で、上海に店舗を構えていたことが知られる<sup>32</sup>。題襟館会の設立前年、彼は上海にモスクとなる清真寺を設立することに尽力し、この時分には上海の回族財界を代表的する存在であった<sup>33</sup>。骨董商という立場から書画の収蔵にも通じ、次節で触れる題襟館会設立前年の古書画展では、他の収蔵家と肩を並べ所蔵の張瑞図画冊を出陳しており、収蔵界への熱心な働きかけが窺われる。

毛経疇は、李鍾珏のもとで上海における自治組織の確立に尽力し、特に救火連合会の副会長（会長は李鍾珏）として消防隊の組織化を進めていた。収蔵の方面では宋元書画の蒐集・鑑別において、項元汴・高士奇を継ぐ稀有な存在と評された<sup>34</sup>。先述の楊逸は、高邕に師事した後に、毛のもとに身を寄せていたという<sup>35</sup>。

これら3家が就いた総理・協理という役職は、同会の経営管理にかかる要職と解される。そうした格別のポストの用意は、同会が財界人としての支援や、財界の人脈による会員作品の販路拡充を意識していたことに起因しよう。もっとも、3家自身も古書画碑帖の収蔵家であることから、現会員が制作した作品のみならず、会員の蔵する古書画碑帖の売買も意識されていたであろう。題襟館会が古書画碑帖を含む金石書画展を企画する所以である。

因みに題襟館会は、設立翌年の1911年に華洋義振会との共催で、会員書画の即売による義捐活動を企画した。その発起人が以下のように伝えられている<sup>36</sup>。

汪洵、何維樸、黄山寿、黄俊、李鍾珏、陸恢、倪田、王震、何汝穆、毛経疇、狄葆賢、哈麐

これによれば、総董の汪、総理の李、協理の哈・毛の他、豫園会の主導者と見做した黄山寿、黄俊、陸恢、倪田、何汝穆、王震といった顔ぶれが居並ぶ。やはり、ここに名の挙がる人士が、如上の題襟館会の役職の中でも特に重きを置かれた者たちと見てよく、そこに豫園会を兼ねる者が多くを占めることは見逃せない。そのことは、豫園会のみならず、題襟館会にもかかる義捐活動を促した

可能性を示唆する。

ともあれ、題襟館会の設立は豫園会より一年遅れるとともに、その役職は豫園会より遙かに多様化し、組織化が進んでいる。このことから、かかる役職の組織化は、一見、豫園会の主導者を核として、増員を図る中で進められたように受け取れるが、これら会員の結び付きを遡って眺望するならば、この組織化を豫園会からの増員と捉えることは、実情に即してはいない。以下に、改めて両社団の設立前史を回顧したい。

### 3. 財芸ネットワークの形成

先掲の「王氏年譜」は豫園会と題襟館会、双方の設立に関わりそうな書画界の事跡について、展覧会活動を中心に、その幾つかを紹介している。それらについて、組織名または企画名、開催時期・場所、主要参画者（発起人・出品者等）といった情報を箇条的に列記すれば、以下ようになる<sup>37</sup>。

#### ①徐園書画助振会、1907年1～3月・徐園

出品者（前掲の両社団関係者のみ列挙）：高邕、汪洵、陸恢、錢慧安、吳昌碩、楊佩甫、倪田、何維樸、蒲華、何汝穆、楊逸、黃峻、汪琨、韓璋

#### ②書画集股保路会、1907年12月・徐園

発起人・参加者（両社団関係者のみ）：倪田、陸恢、汪洵、黃山寿、汪琨、何汝穆、韓璋

#### ③古書画展観雅会、1908年4月・六三亭

発起人：佐々木蘇江、長尾雨山

出品者（両社団関係者に下線、以下同じ）：程祖福、胡琪、嚴義彬、哈慶、何汝穆、程伯佳、虞洽卿、王次乾

#### ④第三次書画展覧会、1908年10月・六三亭

発起人：佐々木蘇江、長尾雨山

補助人：鈴木孤竹、哈慶

賛成人：龐元濟、胡琪、毛經疇、汪洵、王存善、張元濟、程松卿、劉炳照、嚴義彬、李鍾珏、鄭孝胥、陸恢、狄葆賢、張康甫

#### ⑤中国金石書画賽会、1909年2～3月・愚園

発起人：鄭孝胥、陸恢、王存善、龐澤鑾、何維樸、程祖福、張紱卿、汪洵、佐々木蘇江、長尾雨山、鈴木孤竹、李正華、呂景端、嚴義彬、高邕、毛經疇、惲禹九、何汝穆、劉葆良、趙鶴舫、哈慶、張康甫、倪田、胡琪、李鍾珏、狄葆賢

本稿は、これら①～⑤が両社団の組織化を連続的・漸層的に進める過渡期的な企画と捉えることを否定はしない。ただし上記の①～⑤について言えば、とりわけ⑤に対し、両社団の組織化に直接的・決定的な影響を与えたものと見做す。以下、この点について、上記①～⑤の企画の性格と、主要参画者のネットワーク形成という視点から検証したい。

先ず①は、その前年の大水害に対する義捐の書画売買

企画で、二期に亘るものの、結局それで収束した点は留意する必要がある。また、出陳者の顔ぶれは、確かに豫園会と題襟館会の双方の領袖書画家が揃うが、一方で、李鍾珏や哈慶、毛經疇、そして王震といった財界人は見えない<sup>38</sup>。実は、この傾向は②にも指摘でき、時に鉄道建設権の国内保持を歓呼すべく挙行されたこの企画も、目ぼしい財界人の参画はなく、続弾も窺われない。

これに対し、③～⑤は、種々の点で①②と相違する。例えば③④は一連の継続企画であり、延いてはそれが発展的に⑤に改組する。こうした企画の連続性は、①②には窺えない。また、③④の発起人は日本人で、日本人居留区の料亭である六三園が会場であったこと、そして、企画自体が古書画の展示を主眼としたもので、参画者は財界人を中心とすることなども、①②とは際立つ差異である。

これら③～⑤について、少しく補足しておこう。先ず③には上掲の哈慶や何汝穆の名が挙がる他、題襟館会の会友である程祖福（?-1938）や胡琪（?-1915）の名も見える。程は時にコンクリート工場の設立に尽力した企業家であり、胡は外資系の信義洋行で買弁を担っていた<sup>39</sup>。豫園会・題襟館会には直接関わらないが、嚴義彬（1872-1931）は、この頃歿した嚴信厚（1838-1906）の息で、父・信厚が創設した源豊潤票号（為替・貸付等の金融業）を継いでいた。信厚は、李鍾珏が総董を務めた中国通商銀行の創設にも携わり、財界人連合というべき上海総商会の初代総董に就いた時の財界の代表的人物である<sup>40</sup>。また虞洽卿（1867-1945）は、この時期に嚴義彬等と四明商業儲蓄銀行を創立し、胡琪とともに上海総商會に名を連ねている<sup>41</sup>。③は当地一流の財界收藏家による古書画展であったと言える。

一方、④は③が3回目の定期開催に至ることを伝えるが（2回目の記事は未見）、③から④へ参画者はかなり増えている。しかも④では、③から継続の哈慶が中国側の発起人に昇格し、新たに汪洵や李鍾珏、毛經疇を交えることにより、題襟館会の総董、総理、協理が出揃う陣容となっている。李や毛の参画は、発起人・哈の慫慂もあったろうが、如上の財界人との縁を勘案すれば理解しやすい。また、④では『時報』を創刊し、有正書局（書画碑帖出版の最大手）を経営した狄葆賢（1872?-1941?）の名も見える<sup>42</sup>。このような財界人の拡充の他、陸恢のような豫園会にも携わる書画家も加わることから、④は両社団の主導者たちが徐々に参集する過程が如実に知られるのである。

その傾向は⑤において更に鮮明になる。ここでは、④に引き続き題襟館会の総董、総理、協理が名を連ね、領袖書画家においても④の陸恢に加え、新たに豫園会で最も主導的な役割を担っていた高邕や、両社団で活躍した倪田の名が見えてくる。即ち、この⑤に至って、両社団



の主導者が相当数確認できる訳であり、この企画に参集する人士のネットワーク形成と、その持続的な機能が、直後（同年4月）の豫園会と、翌年の題襟館会、双方の設立を促したことは、容易に推察できる。

⑤は、③④が日本人向けの企画であったのに対し、会場を愚園に移し、本国人へ対象を広げる姿勢を明瞭にした。そうした環境は、高邕や倪田など領袖書画家の新たな参画に追い風となったであろう。また、書画家の中でも特に陸恢や高邕、或いは何維樸等は、古书画碑帖の鑑蔵にも秀でており<sup>43</sup>、彼等のような収蔵にも優れる書画家たちは、財界人が多くを占める⑤のネットワークに、①②の書画家をつなぎ合わせ、両社団の素地を形成する上で重要な役割を果たしたと考えられる。先述した怡園画集や飛丹閣書画会の例からすれば、①②の書画家に少なからぬネットワークが形成されていたと見てよく、それは⑤との接続にさしたる困難はなかった筈である。

このように、⑤は③から形成された財界人収蔵家の層によるネットワークに書画家の層を取り込み、両層が混在・協働を果たす上での結節点たり得たと見ることが出来る。先行研究では、個別の財界人のパトロンの事跡を注視する向きにある<sup>44</sup>が、本稿は財界人の書画会への組織的な働きかけを注視したい。それを踏まえ、本稿では⑤に集い、豫園会・題襟館会のいずれかに携わった人士（上掲の下線）と、そこにつながった①②における両社団の関係者、このような財界人と主要書画家で形成されるネットワークを、「財芸ネットワーク」と称しておく【図1】。

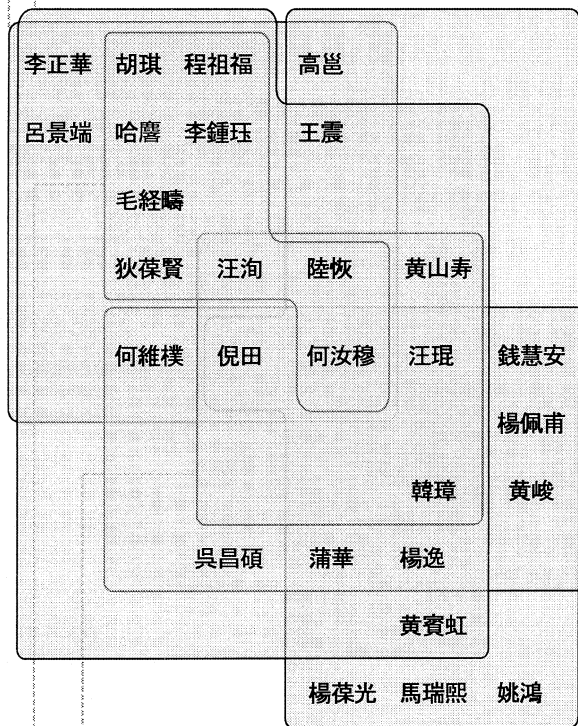
このネットワークは、財界人と書画家の双方に主導者が幾人も存在することから、特定の個人が絶対的な求心力を誇るものではなく、集団主導的色彩を濃くする点が銘記される。例えば、高邕に師事した楊逸たちや、李鍾珏に連なる毛経疇や後述の王震、その他、④で発起人の座についた哈磨や、①②③⑤と財・芸双方の企画に顔を出す何汝穆の存在など、ここには鍵を握る人物・集団が複数備わる。⑤を契機とする財芸ネットワークは、そうした複数のキーパーソンを中心に、一定の増殖を見たと考えられる。

さて、この⑤に関しては、開催の前月（1月）に、事務所を小華園に置くとの章程を公表していることも注目される<sup>45</sup>。題襟館会は、この翌年にここを拠点に設立したのであり、実質的に⑤の主要構成員が傍らで題襟館会を組織したと言っても過言ではない。ただし⑤の企画は、1912年までに、計4回の展覧会を開催する継続性が認められ、それ故に⑤は題襟館会の前身とは言えない。題襟館会の主導者を核とし、豫園会との重複構成員も少なからず擁する⑤と、そこから派生する財芸ネットワークの持続的機能が、両社団を恒常的に維持し、同時に⑤の企画を継続化させる基盤となったと見做すのが穏当で

中国金石書画第二次賽会（'09）会員

中国（上海）書画研究会（海上題襟館金石書画会）各役員

豫園書画善会主導者（会長、発起人、主要会員）



徐園書画助振会（'07）出品者

書画集股保路会（'07）発起人・出品者

古書画展観雅会（含：第三次'08）発起人等

【図1】諸活動の構成員にみる財芸ネットワークの実際

ある。してみると、豫園会はこの財芸ネットワークから一部が分立し、それと重複する人士を含む残りの人士で改めて題襟館会が組織されたと言い得る。換言すれば、両社団は、先行して緊密に結び付きつつあった財芸ネットワークに共存する組織なのである。

ところで、以上に示した財芸ネットワークでは、王震の名が見えない。だが、彼もこの財芸ネットワークの主要人物であることは、ここで補足しておかなければならない。⑤の続弾は、「中国金石書画第二次賽会」として、1909年11月に張園で開催された。その前月の報紙に掲載された開催広告によれば、「総理会務人、中国品物陳列所総理・李平書、協理・王一亭謹啓」とあり<sup>46</sup>、この続弾企画が中国品物陳列所との併催で、李鍾珏（平書）も王震（一亭）も同所の立場でこの企画を主導したことが知られる。

中国品物陳列所は、来るべき南洋勸業会の開催を見据えた産業振興施設で、1908年8月に開設し、李はその総

理を担い、王は協理の座にあった（因みに狄葆賢も協理、毛経疇は文牘科長）。翌1909年、同所は張園に開所を移し、果たしてここが第二次賽会の会場ともなる<sup>47</sup>。これも李の主導であったことは当然予測され、これらのことから、④⑤に携わった李が、王を引き連れ、企画の主導権を更に自身の側に引き寄せてゆく構図が自ずと浮かび上がってくる。時に、第二次賽会の直前に、王が豫園会に破格の額を出資したことは先掲の同社会計報告のとおりだが、既にこの頃には、李一王のラインが財芸ネットワークにおいて重要な位置にあったことを窺わせる。

以上のように、両社団の基盤に財芸ネットワークを措定させるならば、両社団の類似性、例えば豫園会が先述のような金石書画展覧会（1913年）を企画し、一方の題襟館会が華洋義振会との共催で義捐の書画即売会を行う（1911年）といった現象については、自ずと了解される。主導者を共有し、同じネットワークに共存する両社団では、活動内容が似通い、それぞれの独自色が薄らぐのも当然である。

しかしそのことは、古書画碑帖から書き下ろし作品まで、両社団の展示品＝商品の多様性を確保することにもつながり、これによって売買機会の拡充は見込めた筈である。こうした展示品の売買を意識した展覧会活動については、⑤の企画が4回続いたことに象徴されるように、そもそも財芸ネットワークに根差す発想と言わねばならない。【図2】は、中国金石書画賽会を含め、両社団の設立前後に、財芸ネットワークを成す一部の人士が携わった諸企画・活動を、時系列に沿ってまとめたものである<sup>48</sup>。この図から容易に読み取れるように、財芸ネットワークの人士は両社団設立以後も、随意に単発企画を立案・実施し、旺盛な売買活動を展開していた。それ故に両社団は、相次いで多彩な企画を生み出すこのネットワークにおいて、恒常的な活動拠点の双翼として機能したのである。

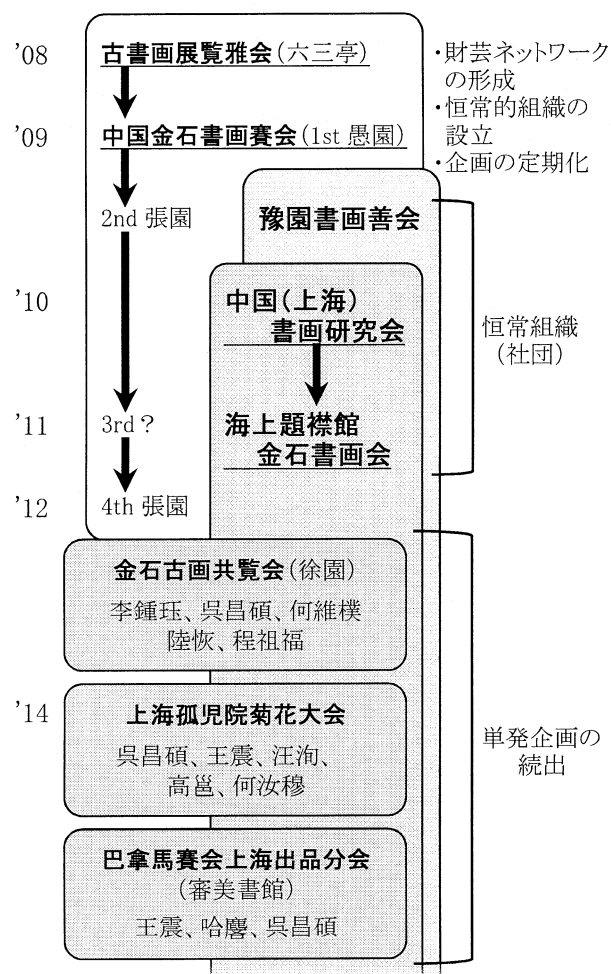
#### 4. 書画社団史からみた財芸ネットワーク

両社団の設立は、喬氏の四期区分説によれば「初歩発展期（1900-1919）」に属する。喬説では前代（承統転型期）との境界を1900年に求めた理由を明言しないものの、喬説の当該期は1900年設立の海上書画公会への論及を皮切りとすることから、この社団が画期の一つの目安であったと予測される。それ以降、豫園会設立の1909年までに設立が確認できる書画社団は、西泠印社（1904年・杭州）、書画観摩会（1906年・広州）、文明書画雅集（1908年、異説あり・上海）となるが<sup>49</sup>、果たして、これらの社団と豫園会・題襟館会とは、ともに「初歩発展」を根拠づける並列的な存在なのだろうか。

この点について本稿は、やはり両社団の設立を画期的なものとして捉え、特に財芸ネットワークが形成される中から先ず豫園会が誕生した1909年を画期の一つの根拠として提起する。書画社団史の時期区分の問題は、上述した類型化の問題と同様に複合的な検討が求められ、この年を画期とするには諸点の勘案が必要である。取り敢えず本稿では、これまで述べてきた財芸ネットワークを画期の有力な根拠とすることに論点を絞りたい。

先述のように、このネットワークは当地の財界の精鋭と一流の書画家による協働を何よりも特質とするもので、しかもその繋がりは広汎に亘り多数の人士に及ぶ。その形成は、決して特定の個人の突出した求心力に頼るものではなく、複数存在する有力財界人・書画家それぞれの人脈に基づくところがあり、種々の事業に際しては、彼等の繋がりによる集団主導的な運営が強く予測された。

加えて、このネットワークの広がり、先述のように当時の重鎮から中堅・若手まで、自ずと世代的にも幅のある人士を覆うことになった。その結果、例えば豫園会では、筆頭格の発起人の楊逸が歿しても、王震や汪琨の



【図2】時系列に基づく両社団の設立と諸活動の関係

主導で民国期末まで組織が維持された<sup>50</sup>。題襟館会の場合も、汪洵の歿後、1917年に呉昌碩を会長、哈麟と王震を会董とする新たな体制を築き、その命脈は1920年代半ばまで保たれ<sup>51</sup>、円滑な世代交代が看取できる。

こうした財芸ネットワークの機能は、上掲の海上書画公会他、両社団に先行する各社団には窺えない。西泠印社は一先ず措くとして、海上書画公会、文明書画雅集、書画觀摩会は、それぞれ李叔同（1880-1942）、俞礼（1862-1922）、崔芹（1841?-1915）の個人的主導の色合いが濃く、それぞれの規模も、伝えられる範囲では決して大きくはない<sup>52</sup>。この傾向は、19世紀末設立の先述した怡園書画会や飛丹閣書画会についても指摘でき<sup>53</sup>、その点からすれば、財芸ネットワークに根差す豫園会・題襟館会の設立は、書画社団史上、類例のない事象であることは明らかである。

上記社団中、西泠印社については、今日にまで継続する大規模な社団であり、例外的に映るかもしれない。しかし、同社が本格的に社約の制定や組織の整備を図ったのは、1913年時のことであり<sup>54</sup>、とりわけその2年後に、題襟館会主導者の出資によって西泠印社内に隠間樓（題襟館）が建設された事実は見逃せない<sup>55</sup>。むしろそれは、財芸ネットワークに根差す題襟館会の中核的機能が、杭州の西泠印社にまで波及した現象と捉え得る。

翻って、豫園会・題襟館会は、ともに財芸ネットワークに根差すことから、古書画展から義捐の展示即売まで類似した活動を展開し、自身の独立性を希薄にする側面があった。主導者の共有に基づくこうした社団を、本稿では「共存型」という新たな類型として括りたい。上記の西泠印社は、かかる共存型に染まりかけた一例と見ることが可能である。そして、これに類する社団は少なからず存在したと予測される。その詳細な検証は今後に委ねるとして、以下に幾つかの事例を挙げておこう。

まず、題襟館会は、1912年の春に移設したばかりの事務所（同社団董事である夏小谷の家屋）を、同年の秋に設立した青澗館書画会の事務所としたこと<sup>56</sup>。下って1922年に設立した宛米山房書画会は、豫園を拠点とするもので、楊逸が発起人の一人となり、豫園会との連合展も企画されていたこと<sup>57</sup>。更に1923年に設立した先掲の停雲書画社は、題襟館会の俞原（1874-1922）と生前親しかった李葭榮（1874-1950）や任董（1881-1936）が発起人となって組織したもので、呉昌碩や王震も加入していたこと<sup>58</sup>。

これらはごく一例に過ぎないが、元来の財芸ネットワークが擁した次世代の主導者は、後続・隣接の社団の設立にも深く関与し、果たして、それらの活動内容も豫園会・題襟館会と似通うことになる。即ち、両社団に見る共存性は、その波及効果も看過し得ず、そうしたことから社団相互の独立性、共存性の問題は、それぞれの活

動形態とともに勘案すべき重要な類型の視点と考える。ともあれ、粗々ながら後の展開を眺望してみると、財芸ネットワークが一応の形成を見た1909年は、共存型社団時代の本格的な幕開けを告げる画期としての側面が鮮明になるのである。

## おわりに

「王氏年譜」の起草は、豫園会・題襟館会の双方が長期に亘る活動歴と顕著な影響力を誇った点に鑑みてのことであった。両社団の存在感は、それぞれ固有の構成員を有し、独自の活動を展開させ、相互に競い合う中で高まった部分も確かにあろう。しかし本稿は、両社団の差異よりも、むしろ主導者の共有という双方の接点に注目した。かかる共有現象は当地一流の財界人と書画家という異なる層の協働（これを「財芸ネットワーク」と仮称した）に根差す点を特質とするもので、その大よその形成は、1909年初めの中国金石書画賽会の段階と見た。この社団史的画期となり得るネットワーク形成を契機に、それを共有する中から分立した両社団は、集団主導的体制のもと世代的にも幅のある人士を擁し、それぞれの命脈を長く保った。そのあり方を本稿では「共存型」と呼び、それが相互の活動の類似をもたらしつつ、後続の社団にも波及した特徴ある類型であることも導いた。

繰り返すまでもないが、社団の画期や類型の問題は、複合的な検討が加えられるべきであり、本稿はその一環として、喬氏の説とは異なる一視点の提起を試みたに過ぎない。ただ、それによって改めて大型の両社団を基軸に書画社団史を眺望する重要性が喚起できたと思う。更に財芸ネットワークを視野に入れるならば、それは書画社団史のみならず、広く文化史・社会史の点からも見るべきものがある。もっとも、今般の財芸ネットワークがどれだけの密度を保持する存在であったか、それは各家相互の繋がりを丁寧に検証することから、明確にしてゆく必要がある。また、両社団をはじめ「共存型」が指摘できる後続の各社団については、その社約や構成員、或いは企画・活動等の諸点から具な跡付けが求められる。以後の課題としたい。

## 附記

本稿の執筆に際し五島美術館学芸員・尾川明穂氏より多大なご協力を賜った。ここに特記し、心より御礼申し上げる。本稿はJSPS科研費JP17H02291の助成を受けたものである。

## 註

- 1 周海燕「我国美術社団研究綜述」（『広西芸術学院学报：芸術探索』2006年3期）、黄小燕「我国伝統美術社団及西泠印社研究綜述」（『新視覚芸術』2010年1期）。
- 2 王青「清末民初的美術社団活動及其美術史的意義」（『芸術

- 探索』2009年1期)。
- 3 榮宝齋出版社2009年。なお、前掲注1周氏論文の時点で、喬氏のこの著は未刊の博士論文であったが、本稿はこの刊行本による。
  - 4 許志浩『中国美術社団漫録』(上海書画出版社1994年)より「停雲書畫社」条。
  - 5 王辰昌主編『中華民国三十六年 中国美術年鑑』(上海市文化運動委員会・虞文1948年)より「史料」の「海上題襟館金石書畫会」「豫園書畫善会」各条。なお、本稿では翻印版『中国美術年鑑・1947』(上海社会科学院出版社2008年)を参照した。
  - 6 前掲注3喬氏著「第二章(二) 經濟因素的影響」の他、孫淑芹「近代海上画派の商業運作模式研究」(『鄭州大学学报(哲学社会科学版)』2012年1期)、陶小軍・丁蘇川「民国前期(1912~1937年)書畫社団与書畫交易」(『芸術探索』2016年3期)等。
  - 7 前掲注6孫氏論文の他、石莉「清末民初上海商人階層の芸術贊助」(『美術』2007年3期)、沈揆一「清末の芸術贊助和海上繪画」(『榮宝齋』2007年4期)、周文婷「海派芸術贊助商：王一方」(『美術大観』2008年5期)等。
  - 8 謝聖明「清末書畫助賑与書畫市場的近代転型：以上海為中心的考察」(『民族芸術』2013年5期)、同氏「助賑書畫社団：近代書畫社団的濫觴」(『芸術百家』2013年8期)等。
  - 9 蘇濱「清末民初的中国書畫雅集及其変異」(『中国書畫』2005年2期)、蘇全有・高飛「論清末雅集」(『湖南工程学院学报』2014年1期)等。
  - 10 王中秀「時間深处的回響：邑廟豫園書畫善会与海上題襟館書畫会会史合編(一)~(五)」(『榮宝齋』2014年4・6・8・11・12期)。
  - 11 本稿は西暦表記で統一する。出典が旧暦表記の場合も西暦に換えた。なお、清末の各年号の西暦対照は以下のとおり。咸豐(元~11)：1851-1861、同治(元~13)：1862-1874、光緒(元~34)：1875-1908、宣統(元~3)：1909-1911。
  - 12 前掲注4許氏著、前掲注5王氏著、林樹中「近代上海的画会、画派与画家(下)」(『南京芸術院学报』1988年1期)、黄可『上海美術史札記』(上海人民美術出版社2000年)より「清末民初上海金石書畫家的結社活動」、徐昌酩主編『上海美術志』(上海書畫出版社2004年)より「第四編 美術機構与美術社団」、以上各文献の「豫園書畫善会」条を参照。
  - 13 以下、各家の名は俞劍華編『中国美術家人名辞典(修訂本)』(上海書畫出版社1981年)の他、前掲注12徐氏編著より「第五編 人物」等に基づき、基本的に諱で表記した。また生卒年についてもこれらを参照し、各家に個別の評伝等が備わる場合は、あわせてそれも参照した。
  - 14 1920年初版、1921年第一次続印、1929年第二次続印。本稿は第二次続印まで翻印した文史哲出版社(1975年)本によった。
  - 15 前掲注14『海上墨林』の高邕の叙に「余亦衰頹、記載之事(上海の書畫家伝：引用者補)、非所能任。嘗以是語楊東山(楊逸：引用者補)、乃欣然任采輯、旁諮博考…」とある。
  - 16 前掲注14『海上墨林』の黄俊の条に「常親炙於高聲公(高邕：引用者補)、故筆意於高氏為近」とある。
  - 17 張鳴珂著(文明書局1923年)。「光緒戊申」(34年・1908)の張の序が附す。
  - 18 その他、前掲注14『海上墨林』所録の書畫家では、王思と徐錡の条に彼等が社団に寓していた旨が記され、金爾珍の条では彼が豫園会の合作に題識を添えていたこと、殷宝穌の条では彼が豫園で経営した得月樓が後に豫園会の会所となったことが、各々記されるが、本稿ではいずれも同社団の主導者としては取り上げない。
  - 19 前掲注10「王氏年譜」が引く新聞記事のうち、『時報』については翻印合冊が備わる(蝠池書院出版2006年)。本稿はこの翻印本による。
  - 20 陳祖恩・李華興『白龍山人：王一方伝』(上海辞書出版社2007年)、王中秀『王一方年譜長編』(上海書畫出版社2010年)を参照。
  - 21 前掲注14『海上墨林』の何汝穆の条に「久居滬、服務於輪船招商局…(中略)…滬地書畫名家、都半相契。」とある。
  - 22 「上海邑廟書畫善会広告」(前掲注19『時報』1910年3月14日)。
  - 23 前掲注4許氏著「飛丹閣書畫会」、前掲注12黄氏著、徐氏著の「飛丹閣」条を参照。
  - 24 前掲注4許氏著「怡園画集」条を参照。
  - 25 「金石書畫展覽会之開会期」(前掲注19『時報』1913年3月13日)。
  - 26 「書畫展覽会」(前掲注19『時報』1913年3月24日)。
  - 27 例えば、前掲注19『時報』では、「中国書畫研究会上海書畫出品会」(1910年3月5日)、「小華園書畫研究会」(同年4月3日)、「中国書畫研究会広告」(同年4月6日)。また『申報』では、「上海書畫研究会簡章」(同年4月10日、11日)等。なお、『申報』については翻印合冊版(上海書店1983-87年)による。
  - 28 前掲注27「上海書畫研究会簡章」所掲の役員一覧に基づくが、各家は前掲注13同様、基本的に諱で表記した(不明の場合、原文のまま)。
  - 29 謝鴻軒編『近代名賢墨蹟』第5輯(謝啓剛1979年)より「汪洵」条、葉鵬飛「汪洵書法芻議」(『中国書法』1999年7期)、同氏「汪洵書法賞評」(『收藏家』2001年11期)を参照。
  - 30 史洛「李平書其人其事」(『檔案与史学』1994年1期)、熊月之「論李平書」(『史林』2005年3期)等を参照。
  - 31 李鐘珏『且頑老人七十歳自叙』(中華書局1922年、『近代中国史料叢刊続編』第5輯 文海出版社1974年再版)「二年癸丑六十一歳」条に上野公園美術協会で古書画展を開催した記述がある。
  - 32 1901年当時、上海に滞在していた黒田清輝の日記(『黒田清輝日記』中央公論美術出版1966年 第2巻)によれば、黒田は哈を「道具屋」と記している(同年5月10日条)。この折、黒田は哈の案内で愚園や張園をめぐった。
  - 33 楊榮斌「近代上海回族知名商人哈少夫」(『黒竜江史志』2013年23期)郭成美「民国滬上回族知名人士哈少夫」(『回族研究』2017年2期)等を参照。
  - 34 佚名「毛子堅先生小伝」(『海上名人伝』文明書局1930年 個人蔵)、戚再玉編『上海時人志』(展望出版社1947年、熊月之編『稀見上海史志資料叢書』上海書店2012年再版)より「毛子堅」条等を参照。
  - 35 鄭逸梅「楊東山輯海上墨林」(『逸梅雜札』齊魯書社1985年)。
  - 36 「題襟館書畫助賑」(前掲注19『時報』1911年8月9日)。
  - 37 以下に列記する①~⑤は、前掲注10「王氏年譜」の他、前掲注20『王一方年譜長編』を参照した。なお、各典拠は稿者未見の①を除き、以下のように前掲注19『時報』に見える。②「記書畫集股保路会事」(1907年12月5日)、③「記古書畫展観雅会」(1908年4月27日)、④「定期举行第三次書畫展覽会」(1908年10月27日)、⑤「中国金石書畫賽会章程」(1909年1月28日)「中国金石書畫賽会広告」(1909年2月22日)。なお、①に呉昌碩を掲げるのは、彼が題襟館会の会友であることによる。
  - 38 この書畫助賑企画の発起人は、会場主の徐貫雲の他、蒲華等、書畫家を中心であった。「王氏年譜」参照。

- 39 程については龔長根・陳軍「華新水泥工業の百年輝煌」(『黃石日報』2010年7月1日)、胡については徐鼎新「從紳商時代走向企業家時代：近代化進程中的上海總商會」(『近代史研究』1991年4期)を参照。
- 40 嚴義彬については謝振声「嚴子均与源豐潤票号」(『浙江工商職業技術學院學報』2015年1期)、父・信厚については、陳述曾「上海早期亦官亦商的人物：嚴信厚」(『上海經濟研究』1981年7期)を参照。
- 41 虞については茅蔚然「中国近代經濟史上的名人工商實業家虞洽卿」(『杭州教育學院學報』1996年1期)を参照。また、前掲注38徐氏論文も参照。
- 42 鄭逸梅「狄平子的『時報』和有正書局」(『芸壇百影』中州出版社1982年)を参照。
- 43 陸恢は吳大澂、張之洞、龐元濟といった高官や收藏家に仕え、金石書畫の鑑藏に精通していった(前掲注14『海上墨林』陸恢条)。高邕は碑拓の收藏に秀で、その室号は所藏の李思訓碑や泰山刻石に因む(褚德彝『金石學錄続補』褚氏石畫樓1919年、松丸道雄編『新編金石學錄』汲古書院1976年再版より高邕条)。何維樸は、祖父何紹基の豊富な藏品を受け継いだ(鄭偉章『文獻家通考』中華書局1999年より何維樸条)。
- 44 前掲注7の各論文。
- 45 前掲注37「中国金石書畫賽會章程」。
- 46 「中国金石書畫第二次賽會廣告」(前掲注19『時報』1909年10月17日)。
- 47 中国品物陳列所の張園移設については、熊月之(秦惟人訳)「清末上海における「私園公用」と公共空間の拡張」(日本上海史研究会編『上海：重層するネットワーク』汲古書院2000年)を参照。またこの第二次賽會の張園開催の意義については、金晶「上海張園舉辦美術展覽會的相關問題：以“第二次金石書畫賽會”為例」(『藝術品鑑』2018年12期)を参照。
- 48 この図のうち、金石古畫共覽會、上海孤兒院菊花大會、巴拿馬賽會上海出品分會については、それぞれ「金石古畫共覽會」(『時報』1912.5.23)、「孤兒院菊花大會紀事」(『時報』1914.11.8)、「江蘇展覽會紀事(念五) 游覽隨筆(廿三)」(『時報』1914.6.26)の記事を参照し、所掲の主要參畫者の中から、【図1】の財芸ネットワークに名の挙がる者のみ掲げた。
- 49 前掲注4許氏著所録の1900～1909年間の社団を参照。
- 50 前掲注10「王氏年譜」は1938年の王震逝世の記事で終了するが、前掲注5王氏著によれば、1947年時点で豫園會は汪琨を中心に維持されている。なお前掲注4許氏著は、戰禍により活動が一次中斷したことを伝えている。
- 51 前掲注5王氏著が1926年の解散と伝えて以降、前掲注4許氏著、や前掲注12の各説ともにこれに従うようである。前掲注10「王氏年譜」では、当該年3月の活動記事を最後とする(「題襟館開常會」『申報』1926年3月2日)。
- 52 前掲注4許氏著の各社団条の所掲會員を参照。
- 53 前掲注4許氏著の「怡園畫集」「飛丹閣書畫會」の各条、前掲注12黃氏著、徐氏著の「飛丹閣」条を参照。
- 54 その経緯は『西泠印社志稿』(同社1947年、浙江古籍出版社2003年翻印)卷3「西泠印社成立啓」を参照。
- 55 吳昌碩「隱間樓記」(前掲注52『西泠印社志稿』卷4)を参照。
- 56 前掲注10「王氏年譜」所引の「書畫研究會簡章」(『時事新報』1912年5月5日、稿者未見)を参照。
- 57 宛米山房書畫會の設立は、前掲注5王氏著が1909年として以降、前掲注4許氏著や前掲注12の各説ともにこれに従うようだが、本稿は前掲注10「王氏年譜」の説に従い、当該年の設立と見る。なお、鄭逸梅「徐竹賢組織宛米山房」(『逸梅雜札』齊魯書社1985年)では、同社団の設立が題襟館會より下ることを示唆する。
- 58 前掲注10「王氏年譜」及び所引の「記停雲書畫社組織之緣起」(前掲注27『申報』1923年8月21日)を参照。

## Summary

# Yu yuan shu hua shan hui and Hai shang ti jin guan jin shi shu hua hui: Separation and Coexistence of Shu Hua Associations in Shang hai in the Late Qing Period

KANNO Chiaki

This article discusses two shu hua (painting and calligraphy) associations founded in Shang hai in the late Qing period, Yu yuan shu hua shan hui and Hai shang ti jin guan jin shi shu hua hui, noting that their distinctive nature marks an epoch in the history of such societies and that these two particular shu hua societies belong to the category labeled “coexistence type.” These two societies are unique in that they were formed through collaborations between two different social strata, first-rate business persons in the city, and painters and calligraphers; this is referred to here as the “business-art network.” The foundation of Zhong guo jin shi shu hua sai hui in early 1909 and Yu yuan shu hua shan hui in the spring of that same year, around the same time when this business-art network was formed, is regarded as an important milestone in the history of shu hua associations. The formation of this business-art network became the basis of the separate establishment of these two societies, which can be categorized as “coexistence type” associations. Both survived long under a collective leadership system comprising a wide range of multigenerational members with similar operations and served as models for other associations that followed.

筑波大学芸術系研究報告 第73輯  
芸術研究報39

編集	筑波大学芸術系 図書・研究報委員会 研究報編集担当：中村伸夫
ブックデザイン	田中佐代子
制作	株式会社イセブ
発行	©2019 国立大学法人筑波大学 芸術系 茨城県つくば市天王台1-1-1
発行日	平成31年2月20日

ISSN 0298-5323

---

# 2018

ISSN 0298-5323

---

## Contents

- 1 ***Yu yuan shu hua shan hui and Hai shang ti jin guan jin shi shu hua hui:***  
*Separation and Coexistence of Shu Hua Associations in Shang hai in the Late Qing Period*  
KANNO Chiaki
-